

病気の神

アイヌ社会では、病気が「病気の神」によって引き起こされると考えられていました。アイヌ民族は、人間の力の及ばないこの世のあらゆるものを「神」としましたが、病気も例外ではありません。日本でも「疫病神」と呼ぶのは共通しています。この点、



佐賀 彩美 (さが あやみ)

一般社団法人北海道開発技術センター
調査研究部研究員

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モントレール国際大学院(現ミドルベリー国際大学院モントレール校)通訳翻訳学科修士課程修了。通訳案内士。

善悪を対立的に捉え、病気は人間に禍をもたらす悪であり、徹底的に殲滅しなければならぬとする西洋的な考え方とは根本的に異なっています。

病気の神(パ<歳または疱瘡>コロ<持つ、司る>カムイ<神>=その一年の病疫を掌握する神)は様々な病神の大集団を率いるリーダーで、仲間を引き連れ、舟に乗って世界中を旅していることになっています。その役割は、至上神から任じられた世界の風紀係で、人間の行いを査定し、行いが正しくない者を病気にして懲らしめるのが仕事です。このため、アイヌの人々は、基本的に病気の原因の全ては自らの日々の生活に起因するとし、病気は自己の行いの報いとして病気の神から与えられたものなので、あきらめて受け入れるという姿勢です。

アイヌ社会で最も恐れられていた病は疱瘡でした。病気の神は、菌の入った袋を持ち、違反行為のあった村や個人宅にばら撒き、人間がそれを吸い込むことによって病気にさせます。

一言で病気といってもアイヌ語は症状に応じて違う言葉を使い分けていましたが、一般的にはアルカ、またはアッカです。アル、アラは<片方、もう一方>の意味で、カは<させられる>、つまり健康とは反対にさせられることを意味しました。その他にも、シイエイエ(シ<本当に>イエイエ<濃みに濃む>)、タスム(タシ<呼吸>スムまたはスン<萎れる>)、イユニン<ズキツとする痛み>、イコニ<お産の痛み>等の言葉があります。

では、病気になった人間は何もしないで耐えるだけかというところではありません。病気が伝染性で被害が深刻な場合には、病気の神に立ち去ってもらうため、ハルエオンカム

オンカム<拝礼する>) 或いはハルエカムイノミ(ハル<食材>エ<で>カムイノミ<神を祀る>)の神事を行いました。神様なので、退治するのではなく、村の上手と下手にイナウ<御幣>をたて、幣の姉妹神に接待役を引き受けてもらい、病気が来る方向のイナウのある場所で、火を焚き、供物を散布し、併せてお神酒を捧げて、歓迎の宴会を催すことで、病神の空腹を満たすだけでなく、旅先までの食事用弁当も持たせて心安らかに旅だつてくださるようお願いしています。その際供物とする食物は村中から集めますが、なるべく粗末なものにします。それは、病気の神に、この村にはろくな食べ物もなく、良い場所ではないので、長居しないほうがよいと勧めるためでした。そして、病気が収まるまで騒がず、物音を立てず、人の交流も最小限に控え、日々の行動も抑え、心静かに暮らさなければなりません。恐れ慎むべき神に対し、ハレンチな行動をし、神をも恐れぬ輩は天誅の対象となり、村中に病気の菌を撒かれ、果ては廃村となってしまいます。これらの思考と行動は、コロナウィルスの伝染を防ぐため採られたステイホームの方針そのものです。

アイヌ的な考えに従うと、この度のコロナ禍は人間に反省を促すためパコロカムイがウィルスをばら撒いた結果ということになります。そうでなくても、便利さと引き換えに、地球環境に負荷をかけた人間の行いに対する報いがコロナではないかと漠然と感じている人は少なからずいます。確かに新型コロナ流行後、世界の自然環境は画期的に改善されたとのこと。

*本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として(一社)北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。

藤村 久和 氏 北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般(精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等)を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践している。また、アイヌ民俗文化財調査(北海道教育委員会)に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する傍ら、國學院大學北海道短期大学部(滝川市)で開催のペカンベ祭で伝統料理を提供している。主な著書:『アイヌの霊の世界』(小学館、1982年)、『アイヌ、神々と生きる人々』(福武書店、1985年)、『アイヌ学の夜明け』(梅原猛氏との共編、小学館、1990年)、『知里真志保フィールドノート(6),(7)』(北海道教育委員会、2007、2008年)、『平成20~29年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1~9』(北海道教育委員会、2008~2017年)等。